

東大企業・大学訪問を通して

今回の東大企業・大学訪問には、はじめから参加しようと考えていたわけではなく、むしろ面倒だからという理由であまりよい印象を持ってこなかった。しかし、訪問先を考えると、この機会は滅多にないものだとして認識し始め、仙台に帰ってきたときにはかなりの充実感があった。

この企画の最初は、DF・笹川平和財団共催夏期プログラムで始まった。全体講話として、義手の開発をしている近藤玄大氏の話を読んだ。気軽な選択肢となる義手の開発というもので、非常に興味深い内容を聞くことができた。今までは、義手を作る側の目線しか考えてこなかったものを、見方を変えてデザインというものにもこだわっている義手を開発しているということで、ものづくりは映画制作と似ているということだった。「もの」は世界共通言語であり、そこから多様な主題が生まれるという。自分の手がないわけではないにもかかわらず、義手を使用している方々の立場に立って考えられるその発想力と、その考えたことを行動に移せる実践力は目を見張るものがある。

ディレクトフォースの各グループでの対話は、まず藤村峯一さんからだった。ブリヂストンの米国本社 CAO をつとめたことがあり、海外での経験が豊富であるようだ。私たちの質問にそれぞれ答えてくださった中で、最も強調されていたことは、「グローバル化は思った以上に進んでいる」ということだった。悪い面も当然あるが、なってしまったものは仕方がない。その流れに乗っていくためには、日本人は特にプレゼンテーション能力を高める必要があるとおっしゃっていた。確かに、今の日本では、発表能力の不足がたびたび話題にされている。また、「レアになれ」ということもよくおっしゃっていた。1人という存在になると、自分とは何かということがわかるらしい。その場では、なかなかぴんとこなかった。しかし、その言葉をかみしめればかみしめるほど少しずつわかってくる。

二人目にディスカッションをした前川美湖さんは、海洋政策に関するプロジェクトを行っており、様々な国と接してきたようだ。話によると、最初から頭ごなしに「あいつが悪い」ときめつけてしまうとなにごともうまくいかないということだった。これは、三人目の長崎文康さんがおっしゃっていた、「リスペクトする姿勢が大事だ」というのにも共通点がある。多様な世界を生きていくために、自分だけでなく、相手の心もわかっていく姿勢が今後生きてくるのではないか。この方との質疑応答は、「今までいったことがある最も北は?」「最も高いところは?」などと問われることから始まった。一瞬何のことかわからなかったが、これはその場で考える重要性を説くために用意していた質問で、長崎文康さんが面接試験をするときに尋ねることだそうだ。また、自己紹介の時に、「秋田の長崎です」

とおっしゃっていた。これは、秋田県生まれであることと名字が県名であることを合わせていつもいっていることのようなのだ。自己紹介は特に大事で、相手に自分のことをわかってもらうために工夫をするといいということを教わった。そして、グローバル社会を生きることについて、これからも大事にしたい言葉は、「高校時代の投資は、90歳になっても生きる」ということだ。この企画に参加したことも将来につながるであろう。

午後の企業大学訪問では、東京大学医科学研究所感染遺伝学分野の三宅教授の元へ向かった。私たちのグループでは、研究職全般について興味のある人が集まっていたため、生物分野と工学分野で訪問したいところが分かれたが、最終的に生物分野と決まった。

そこでは主に、感染症と免疫が、遺伝とどのように関係しているのか、また、自分と体が認識するための仕組みなどを研究しているようだった。はじめに、東大にあるスーパーコンピュータの見学をさせてもらった。そこは国内最高級の演算能力を持っている。およそスーパーコンピュータ「京」の20分の1だ。遺伝子の解析をする場合、あらかじめ分けた遺伝子の情報を読み取り、それをパズルのように元の配置に戻す作業が必要になる。その際にスーパーコンピュータが必要になるのだ。三宅教授は、昔ここの消費電力をできるだけ減らす努力をしていたらしい。生物分野といえども、工学とも関わりがあることをするようになってきているのだという新たな発見がそこで生まれる。

その後研究室を見学させてもらった。そこでは病原体とそこから自分を守る仕組みについて、どのように自分か敵かを見分ける仕組みなどを研究しているようであった。そこまで深く勉強していない私にとっては、おっしゃっている内容がかなり難しいことでよく理解できない部分があった。しかし、わかりやすいところでは、今の医療は、広く一般に受け入れられる医療から、個人レベル、さらには分子レベルでの医療に移り変わっているということだ。昔は、遺伝子の配列を調べるのにとっても長い時間とお金がかかっていたのに対し、今では一人110万円程度でゲノムの配列を調べられるらしい。ただ、その配列を見ただけでは何もわからない。どこの情報がどのような病気と関わっているのか、そのようなことを研究し続けているそうだ。さらなる研究の進歩を期待する。

私たちのグループからの質問で、物理と生物のどちらを選んだらよいかという質問に対しては、次のような答えが返ってきた。研究においては、物理は今やチームプレイとなっている。しかし、生物はまだまだ個人を出せるところが残っている。どちらがいいかというのはいわゆるわからないが、好きな方を選ぶのがよいようだ。

夜に行われたOB OGによる座談会では、多岐にわたる話を聞くことができた。話を聞いた3人は東大生だけであったが、境遇は様々であった。はじめから東大を狙っていたという人もいれば、高2の冬からいきなり学力が伸びて、いつの間にか入っていたという人もいた。ある一人がおっしゃっていた、「どこで気を抜くか、どこで本気を出すか、この切り替えがうまい人は伸びる。」という言葉が印象に残っている。時にはしっかりと休息をとる

ことが必要なのだと思った。しかし、はっきりとは言葉にはしていないものの、相当な努力をしているということが感じられる内容であった。

二日目は、東大の見学があった。ワークショップ「進路を見つめ直す」では、今まさに自分が問題にしていることがテーマになっていた。自分は将来何になりたいのかがはっきりと決まっていない。しかし、このワークショップによって、東大に入った人はどのような動機であったのか、他の人の意見も交えながらいろいろ話せるのはよい機会だと感じた。東大生のプレゼンテーションを聞いて印象に残っているのは、はじめは動機が何となくであっていいということだった。そのうちに、自分がどのようなことがしたいか見えてくるはずだから、そうしたら自分の将来につながる大学を選べばいい。そんな話だった。もう一人は、はじめから明確な目標を持っているということで、対照的な話が聞けたが、どちらにも共通するのは、この大学ならこれができるといった、筋道を考えて大学を選んでいるということだ。また、自分の偏った見方だけでなく、他人の目から見た自分というのも意識しているなど感じられた。こういう風に自分はどうしたらできるかということを考えてとき、各大学の特徴を知ることが大事だと学ばされるものだった。

この東京大学・企業・大学訪問を通して、家に帰るまではこの企画の趣旨を忘れかけていた。しかし、改めて振り返ってみると自分の視野を広げるいい経験になったと思う。だが、それだけではない。この行事に参加して、期待していた以上のことを持ち帰ることができた。このことを、どう活用していくかしっかりと考えていきたい。